

祭歌

作詞 J'Soul (浅羽一)

広場へ続く長い石段を、^{あかり}提灯に誘われ駆け上がる
桃色の浴衣に黄色い花を、咲かせた君が目に入る
笑顔溢れる人混みの中、離れないように手を握る
夏色の空気に火照った肌が、太陽みたく熱かった
金魚すくいや射的、輪投げ楽しむお面たち
祭の景色は華やかで、束の間の夢に紛れ込む
儚い夜の幻は、明るい祭囃子に飾られて
空に咲く花に照らされた、君の横顔幻想的で
次々に咲く花を映す瞳に心吸い込まれて



子供が走り隣り横切ると、笑って振り向き呟いた
『私たち、昔と今とじゃ何が大事なものに変わったの?』
僕は左手見つめて思う、何より愛しい君のこと
心地よい夜風が汗ばむ体、優しく撫でて過ぎてった
焼き鳥やリング飴、^{どうもち}玉蜀黍や綿菓子
祭の匂いは懐かしく、思い出の中と変わりなく
二人で食べた焼きそばを、変わらぬ二人で^{っぎ}来年も食べようと
■繰り返し

声をかき消す花火の音より、大きく高鳴る胸の鼓動が
寄り添う君に聞こえやしないかと

■繰り返し